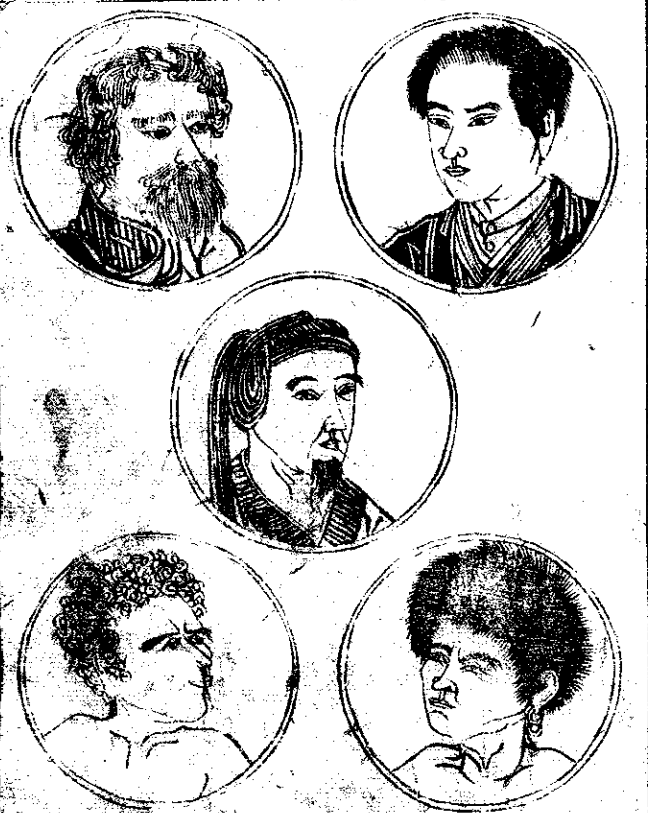


小學讀本
第一

T1A1
10
Ta84

小學讀本第一

第一
凡地球上の人種
ハ五子分きたリ
亞細亞人種 歐羅
巴人種 馬來人種
亞米利加人種 亞
弗利加人種 是カ

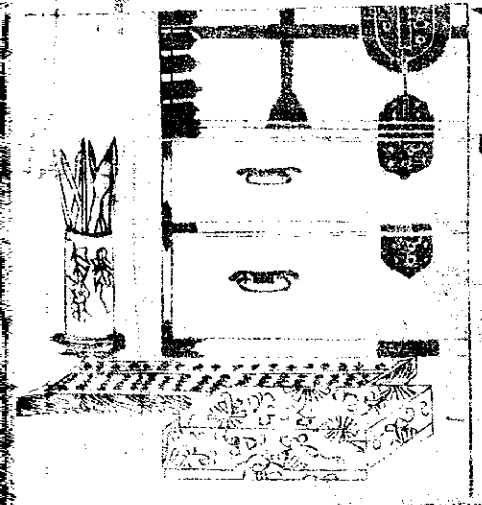


田中義原
那珂通高

編輯
訂正

り日本人の亞細亞人種の中あり
 人は賢きものと愚なるものがあるといふは學問
 と學びたることよりなる賢きもの世の用
 へられて愚なるもの人は捨てらるゝこと常
 の道なきは幼稚のときより能く學びて賢なる
 のとなる必無用の人となる
 ことあるを

幼稚のとき先日用什器の
 名を記して其用の方を知る
 筆の字を寫し又畫を



寫す身あり ○算盤の物を數ふる用は
 庫の書籍を納るゝ箱あり ○算筒の衣裳をど

入るゝ器あり
 又平生食すべきものゝ名を記しこれを調理

て食物とせば法を知るべし
 ○食物とせばべきものゝ種

々あり
 第一の穀物あり ○穀物とい

稲麥豆粟黍の類といふ ○此
 等の皆田畠を作りて其實を



取り或は炊き、或は炙りて食物とまるなり、
 第二ハ肉類、魚鳥獸肉の類といふ、
 此等の或は炙り或は煮て食物とまるなり、
 第三ハ菓あり、菓ハ葡萄梨梅桃柿橙蜜柑の類をいふ、
 此等ハ多く生みて食し又鹽を漬けて食物とまるなり、



第四ハ菜蔬の類なり、
 此等の畠に植る作るものと野に自生するものとあり、

煮て食し又鹽漬とまるものあり、
 凡て此の類と根とを食物といふ實を食物とあるもなり、
 此の如く平生用ゆる食物什器をハ能く心を留めて怠ることなき、

人の業ハ種々ありて其學ぶべきところ各異あり然きども先書と讀み字と寫し物を數ふることを學ぶと第一の務といふこれを普通の學といふ、
 この學を為され何きの業を習ふこと能はば、

故子ハ六七歳に至まじハ皆小學校に入りて學

通の學は従ふべし。○小學校の士農工商の必
學ぶべきの業を授くる所あり

學校に到りては何事の一心は師の教に順ひ勉
強して學ぶべし

何事や學ぶるも勉強を第一とせ勉強せざれば
學問の上達あること能はず

一事までも記し得たる所は能く心を用的て忘
るべからず

初より多く記せんとせきば却て忘るるものお
り故に怠りなく日毎は一事を記し身して念を
とまひ其記し得たる所の事自歳と共に積もり
て多きは至るべし

他人の一人ひ讀む所の百たびもこれを讀み他
人の十たび習ふ所の千たびもときを習ふべし
○斯の如く勉強して怠りなければ必多く事を
記し得らるべきなり○愚かるものも多く事を
記し得るときは無用の人たることを免るべし
學校までハ授業の暇は遊歩の時間なり○此時
間子の遊歩場は家でハ身を動かし心を慰むべ
し○怠りなく勉強したる後ハ遊歩するはことよ

樂となるものなり、

故に遊歩を樂とせんとおも
むるに、授業の時間の急が
く勉強をべし、

遊歩場を出て、男児の戯
る、技の種々阿まきども、決
して危き遊をいなしへら
らば、○輪を廻りし紙鳥を、

飛だし、球を投ぐる等と宜しとす。○朋友相集り
て遊ぶとき、自擅し、他人の樂を妨ぐべから
す。

女子の遊は男児と異りて、
走り旋るあどの戯をいぢ
みべうらば、○朋友を伴な
ひて遊ぶ時の心を和らげ
て、何事も親しくみべし、

第二

我等ハ河の中まで遊ばんとす、岸の邊ハ水深
ゆるま、水は入りて遊ぶことを得べし、○河の正
中ハ深きゆゑ、遊ぶべからば、若し深き所ハ



むとき、復出づること
 能はざるべし。汝が衣
 裳、濡ひたまは陸ま上
 りて、これを乾かすべし。
 汝は、この小舟を乗らん
 とする。○小舟は覆へ
 り易き故、漫る乗るべか
 らば、も一過つ時の水は
 陥りて、其命を失ふこと
 可るべし。



山見、新しき紙鳥を手に取り、彼を手に持て

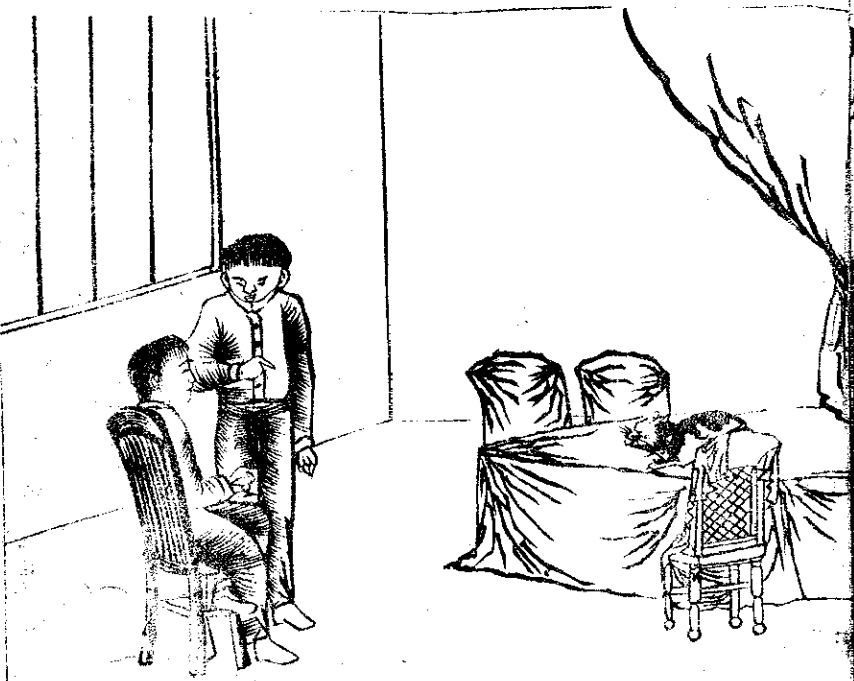


走るを見ゆ。○彼の紙鳥
 を高く飛ばせんと思ふ
 あり。○汝も紙鳥の颯る
 を欲する。○紙鳥の颯
 りたるときは、能く心を
 用ゐよ。○糸の樹の纏み
 ことあるべし。
 彼の新しき帽を持て、

○其舊き帽は破きたるゆゑ、新しく買得たる

一巻

ちり○新しき帽を○心を
 用ぬと或は毀り或は濡す
 べからば○凡て新しき時
 より大切も持てば後まで
 も破き難し故も何物もて
 も鹿未もあべからば若心
 を用ぬまゝして毀つことあ
 らばその罪と免るべから
 べ



を○許さべからば○汝ハ此猫の鼠を捕るを見

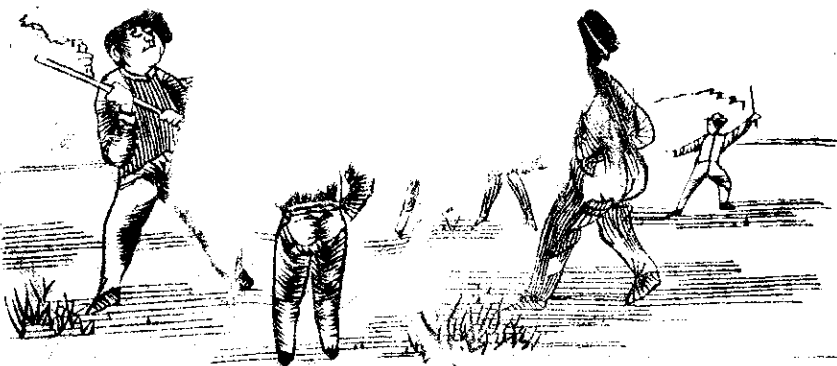
此猫を見よ○汝は鼠の上は坐せり○これよき猫
 子を飼らば○汝ハ猫
 を追ひ退くることを
 得べしや○否乎と
 さば必猫を噛まるべ
 し○猫ハ他所より追遣
 るべきなり又此所を留
 め置べまらば○猫ハ此
 室の中を留め置と雖
 臥床の上を上ること

たりや。○見たり夜間、鼠を捕ふること、復た

汝ハ小舟ヲ乗せる人を見たりや、彼ハ何如にして、其舟を行るや。○彼ハ櫂を以て、小舟を漕げり。

群兎相集り、毬を投げて遊び居きり。○彼等の棒を持てるハ、投げたる毬を受留るを以て、樂とみるなり。若

其毬を以て、能く



る者セバ、負とみるなり。

此毬の柔にして堅きもの、ま、何れもさるもの、人々中りても、傷くことあり。○此ハ善事遊ぶれども、熱き日は、早くこれたつた、酷暑ハ、熱さに觸るると、身身を害ふを以てなり。大陽の昇りたる時、我

等の遊を止むる時、の來くるなりと思ふなり。

○大陽の昇りたる後までも、猶寝所を臥きこと
あらず。我等の大陽をば見ることを得ざること



其出づるを見ることなほ。○
汝の大陽の赤きを見たりと
と有りや大陽の赤きとまは
大抵早きものあり

これハ林檎の樹あり。○汝を
此樹の蕾を見たりや。○此樹
よハ紅き蕾満てり。○此蕾を

取るべからず。○暫過くれ



ハ其蕾皆開き美しき花

とあるのみならず後ハ
ハ實を結びて其味甘き

果となればあり
彼兒ハ牝雞と養へり。○

雞ハ穀物と食するること
速なり。○これ啣むこと

なくして吞むが故あり
然きとも喉の下に餌袋

といふものあり吞み





第三

彼女ハ鳥を捕へて籠み入き置けり○此鳥ハ馴
きつゝ又時々してハ噪き居ることあり

たる穀物は先づ此袋に入
りて置く暫く停まりてそ
れより漸く腹み入るもの
なり



や○此鳥今ハ馴れたる
ども初をよく暴きたり
○汝ハ鳥の聲を聞くこ
とを好む又好まざる
り○吾ハ鳥の聲を聞く
ことを好むの事からば
又其形を見ることを好

めり○此鳥ハ籠より出づること
を願へるなり○
若籠より出づるとも再歸り来るべきなり又其ま
まに飛び去るなり○凡て鳥ハ自由ニ山林を遊ぶ

こゝを好む故に籠りの出づることを願ふに

出づるに再歸り來ることなし

我を惡しき小兒を好まざ
るも此れを遠ざけんと
す。惡しき小兒までも吾
はこれと打ち傷くること
あり。然きども共は遊ぶこ
とをば好まざるあり



彼子ハ彼小女の為に親切ありや。然り彼子の
親切あることハ小女の躰を倒さざるを幸と

執り導くを見て知るべ

し。彼二人ハ道ヲ迷ふべ

き。否彼子ハ能く道を

知る也。二人とも道

ヲ迷ふことあり。彼等ハ

林の中を過ることを恐る

る。否恐るることなし

○小女の母ハ彼子の恐る

ることなきを知りて

こきせ任せたるも。親



切に導きて家は在ると同く安全ならむ

あり。若又家ま歸らんと
まるときまの自在は歸
り得らるべし。

汝の杖を携へたる老人
を見たる。彼老人の
路傍の石の上は息ひ其
手を杖の上は置けり。

彼の顔と其白髪あるは由りて、年老たるを知り、
又年老たるは由りて、體の屈みたるを知きり。
何は由りて彼の杖を携ふるや。老人の杖の為
は、歩行の杖をくつて、歩行し難し。彼の年老の
まじりて起つことと歩行することの得べし然き
ども、急ま走ること能はば時



時途上は休して息を續き杖
に頼りて、徐に歩行あるあり
爰は五人あり。此の人の
年老たるを知きりや。此人
の白髪は長あまき。老人たるべ
し。此人等の手は杖を持ち
たる老人と同しく年老たり

然きども其身の猶壯健あるのみならず、其も頼り
 まして自在に歩行せることを得るなり。



彼等の持ちたる笛の名をバ
 何といふぞ。此の刺吹あり
 ○彼等の樂隊の兵隊を召ま
 此笛を吹くことを鍛錬せる
 あり。○此笛ハ兵隊の行列を
 整ふる合圖は用ぬ又ハ祝日
 の音樂に用ぬるものあり。○

此笛ハ管長くと先の細きなるものなり
 を發する一事最大なり
 汝ハ此人の服飾の中にあ
 るものを書冊なりと思ふ
 う。○否これハ卷物なり。○
 然らば書冊の次第を數ふ
 るとき何故に卷二卷二と
 云ふや。○この唱ハ漸く轉
 れるなり古ハ口ハ卷物ま
 て書冊からさるものも卷
 一、卷二と呼びたり。其後今の書冊は果して



も猶昔の鳴ま泣がへるあり

良き老人ハ我が好ま随ひて問ふ所を教へ又能

く小兒を愛するなり。然り

彼ハ小兒の善きものぞ愛

されども悪し小兒をバ

決して愛あることなり。

善き小兒をきハ好く何

事をも教ふるあり。



汝ハ此女子を見たるなり。○何故ハ其手ぞ上げて

たるなり。○皮女子ハ籠ハ鳥と入き置きたれども

心を用ゐること深からば

る故ハ鳥を養ひ得ハ彼籠

を持と即其鳥逃げ去りて

直ハ林の中ハ飛び入りた

るなり。○此とき驚きて手

を擧ぐるとも再捕ふること

能ハざれば何の用も立

つべからば。○彼の鳥を逃がしたるを吾ハ却て

甚喜べり鳥ハ自由あることを好むものなれば

なり。





上は遊ぶは天然の性おれはこれを捕へて、苦む
るは善事ことよのらむべし

第四



此女子は愛まへまき人形を持てりこれ等ハ遊ぶ
は宜しき具あり必大切ハ弄
ぶべし。人形を舞をばとき
ハ静子動くして毀るへから
ば

母ハ小兎ヲ向ひて何きの人形を求めんとする
やと問ふ小兎ハ自好む所を指し示せるなり
○此小兎ハ人形のみを弄ひて倦めるときは
何事ぞなばや○毬を弄ぶことを好むあるべし



系山物遠之系

○此店より列ねたる品は皆小
兒の好むものなきども此小
兒の静ある娘ゆゑは父形を
愛して能く心を用ひこれに
損ひ毀ることなし

梟の終日密樹の枝をり夜
は入まは始めて飛び翔るか

り○此鳥の眼力甚強きゆゑは晝
間ハ却て物を見ること能はず暗
夜ハ明あること人の能く日中は



物を見るる如し

馬を乗る人あり○汝ハ馬を乗ること好む

う○我ハ馬を乗ることを

好めり然きども彼の如く

疾く走ること好まば徐

ま歩まあることを好めり

○此馬ハ何故に疾く走る

や○馬ハ彼を鞭うたる

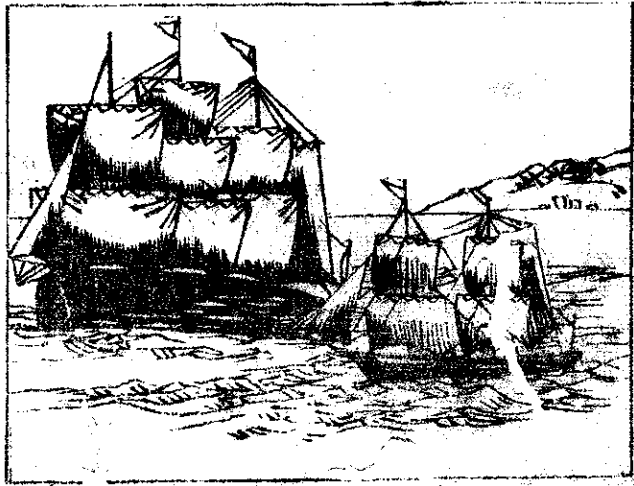
ゆゑに其痛堪へずして

疾く走るなり



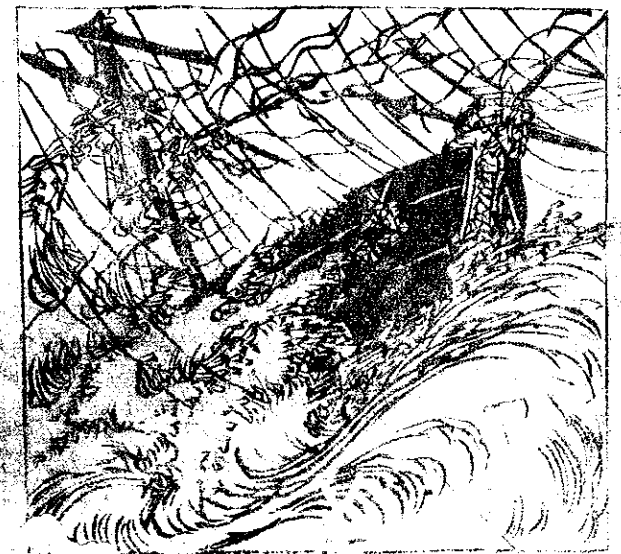
爰も小船と大船あり小船も三本の檣あり大

船も三本の檣あり汝の檣の用と知きりや○檣の凡て帆を揚ぐる為に設けたるかり○汝の海を渡るも小船も乗ることを好むり○風吹きて浪の立つ時ハ我を船も乗りて海を渡ることを好まば



其覆らんことを畏るゆゑなり○これハ蒸氣船ありや○否蒸氣船は帆前船あり

爰も暴風の日海上も浮びたる船あり檣も折き帆も破きて甚危き状あり○此船ハ帆前船なるべし○蒸氣船おれハ斯る難は罹ること少からん○これハ軍艦ありや○否商船あり船の腹も炮門もを見て知るべし○此小兒ハ幼年あるゆゑも水の深き所も入ると能えば○此小兒ハ何をなさんとあるや○こ





れ、蓮のふき葉に大なる葉
 とを採らんとするあり、ゆ
 し、岸あり、遠く離き下りくと
 まい、水も漸深くあるゆゑ、
 歸ること能くするべし、
 一人の男ハ帽を被りて左の
 手ハ杖を持てり、此人ハ此
 家の主人にて今他所へ出で

て行かんと思はる、状あり、○帽を手は持たたる人
 ハ上着と袴を以て肘を肩のせり、これハこの家

の僕として事となはし、便あ
 るがゆゑあり、僕ハ今主人
 の出で行きて後、まの終日空
 しく暮れ、ことを欲せ、以て
 其為、まへも事を問ふところ
 あり

人ありて、草を積み上げたり
 此草の乾きたるを枯草と云
 ふ、○枯草の車は載せてこれを馬に引かせ置
 小屋は運び入る、○草ハ枯きて乾くを待たず



速ま



小屋は運び入る人も
 雨は遇ふ時の再濟る
 るものなきばかりの此
 枯草の半馬の食とあは
 べし。馬は枯草と麥と
 を食せれども其最良を
 ものい來あり、

人よ耳目口鼻のありの鼻
 の香を嗅ぎ耳の聲を聞き口
 の食を味ひ又思ふこと
 を言ひ目の物を見るもの
 ありの鼻は口と



の口一つありて目と耳
 との二つありて耳と目
 との二つありて口の二
 つありて身聞く如くは
 言語を多くきべからば
 ○又人よ口の二つの手と
 二つの足とほきども口
 の口一つありて業をい
 多くあは

第五

鶴の大なる鳥として雛の間は其羽毛茶色を

この生長して後の雪の如く白くなるなり。

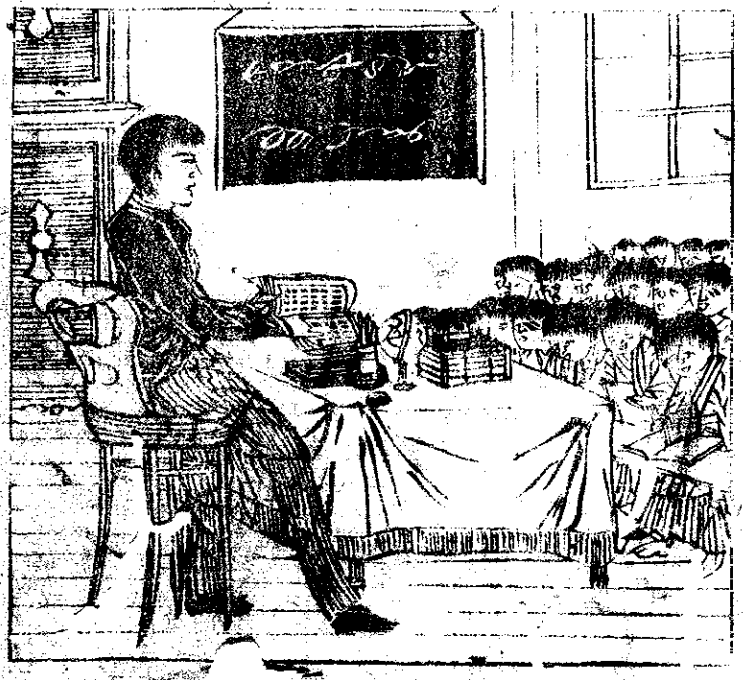


の鳥は長頸まで長
き脛あり。はつ卵
の大きして白きもの
なり。此類の鳥は水
鳥といへり。浅水を
涉りて魚虫を食とす
せども水上の浮ぶ
ことなく夜は棲す。

眠るゆゑなり。

学校の教師入り来きり數多の男兒と小女子と

あり。此小兒等皆
書を讀み字を習へり。
校中も石盤と机
と書籍とあり。汝の
學校も行くことを好
む。汝の書を讀み
又語を綴ること能
くや。吾の書を讀
むことを好めども未能く讀むことを得ず。



今日寒き日あり○雪の二様は地上に積ま



り○小兜は氷の上を滑
 べることを好み○此遊
 の甚危きものゆゑ能
 心を用心せねば危るべ
 らば○もし顛ひ倒る
 ことあらば身を傷め
 一○賢き小兜はかく
 危き遊を好むことなく

只遊歩場は於て遊ぶのみ

此兜の手を伸べて卵を取らん
 とは○巢の中も○數多の卵の
 り○こきい雞の卵あり○雞の
 巢の傍に在りて飛ひ去らばと
 きい卵を取らるることとを憂ふ
 るゆゑなり○雞の卵よ小なる
 ものと大なるものとあるは其種類の異あるゆ
 ゑなり



瞿麥と桔梗との花あり○小兜は桔梗の花を執
 り娘の瞿麥の花を手を持ちてり○瞿麥の花を多



く紅色なり。桔梗の花は紺色なり。瞿麥は多種かれども概夏は花を開くなり。

數多の鼠あり鼠は日中も出づることあり。夜半に至りて各出でて遊べり。此出でて遊ぶとき、梁を行き棚に登り、



厨に入りて食類を竊り食ひ。然きとて猫の聲を聞くと、驚きて一時は静まり窓穴の中へ



逃げ入るなり。故に猫の居る處より出て遊ぶことなり。爰は馬車ありて數多の小兒と女子とを載せたり。汝は此小兒と女子とを聞き、これを知れり。こ

一ノノ

此は皆我學校より来る人なり。彼の夫は馬と同
 しく走り。彼等ハ汝を見たりや。彼ハ吾
 見るときは必其帽を脱ぐ故に我亦其時ハ
 帽を脱ぐべし。

この箱の中は響あり。汝
 ハ此響と何なりと思ふや。
 ○此箱の中は響あるべし。汝ハ何
 なると思ふや。○この響は
 小なるものなり。吾ハ小なる鼠



なると思へり。○凡て響ハ其物ハ應ニ度ハ過
 ぎざるものなれば猫もはらば犬も鼠も



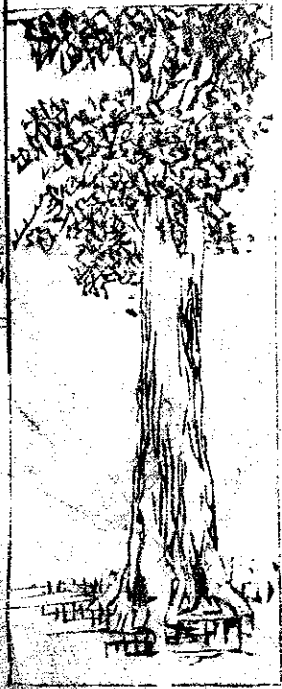
何れぞと思へり。
 爰亦四人の小兜あり。二人
 を坐して二人は立てり。○
 一人の老人ありて此小兜
 等ハ神の語を説き聞か
 んとす。○老人云々。凡て人
 と神を敬し我身の幸を
 願ふむとならば善き道を

行ふべし。○善き心を持ちて善き道を行ふこと
とを欲せば小児の時より學問を數むべし。○學
問して壯年ふ至り毫も過さざらん自神の助
を得べし。

杖を携へたる老人阿
り足も不自由にて目も疎
くなきり然きども此老人
も初ハ小兒よて今の汝等
の如く疾く走りまじ遊ハ
戯れしなり。○今ハ足も眼



とる。○由る。○小兒の肩は倚りて立てり。○見ま
此老人。○これを一年ハ譬ふきハ冬の時侯の至
きるなり。○汝等ハ冬の時侯は至らざる前ハ學
問を勤めて世間の利益を考へ出ださハ春の萬
物を生長するが如くせざハあるべからば。
爰ハ槻の大木あり。○汝ハ此木の年と經たる數
を知らる。○此木の年と經たる數を知らんこ
とを欲せば横ま切り
て本理の輪を數へ見
るべし。○本理の輪ハ



年毎に一つの外の生ぜざるものなれば輪の數
 りて其經たる年の數を知らるゝなり



汝等毎朝早く起きて神を拜
 し先今朝まで無難は過ぎた
 るも神の賜ありかく夜明く
 る毎は日光を給ふよよりて
 父母の意なき顔を見ることが
 を得るも其恩ありて射す

ついで其後は吾も身もて幸と與へて過無
 うら志めんことを祈るべし

第六

此人等ハ小舟を乗り網
 を以て魚を捕り海濱に
 歸るなり○網を海上
 より引きて魚を捕ふると
 きの鱗はるも鱗をまき
 大なるも小なるもの同
 く其中は入らざるもの



あり。○汝ハ此處に居る三人の男を見たりや。○
 又彼等の捕へたる數多の魚を見れば。○海中の
 魚ハ其種類多くして大なるものと小なるもの
 と良きものと良からぬものとあり。○一人の男
 ハ小きて良からざる魚をば取りて海中へ投
 げ入きたり。○一人ハ大なる魚を籠に入ると所
 あり。○入きたる魚の此籠は満ちたるときハ我
 が家へ持ち歸るなり。

此地を何如なる處と思ふや。○花園あり。○此處
 には數多の美しい花あり。○正の井邊に杖を持ち古



の手は井邊を持ちたる小兒
 あり。○小兒の後ハ杖を持ち
 たる娘あり。○汝ハ此處を
 此小兒と娘との為に設け
 たる所ありと思ふや。○又
 この小兒等ハ喜みて遊ぶ
 と思ふや。○一人の娘ハ瓜
 を入きたる籠を持ちて。○
 汝ハ花園を遊んで花を

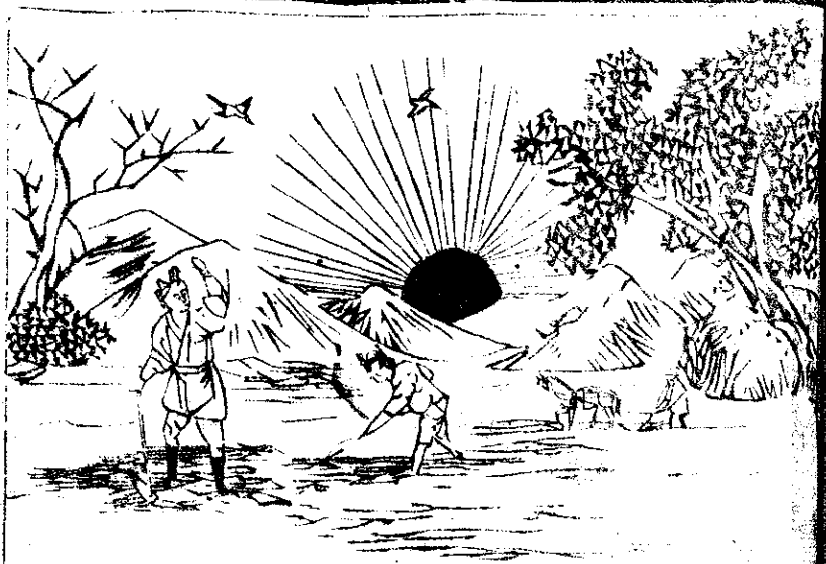
花を折り又果を取るべからず。

爰に果を摘み入きたる籠あり、この果は葡萄と梨子あり、籠の外は掛りたる葡萄の蔓あり、其影は籠の左に在り然きば大陽の何きの方よりと、いふことぞ知れりや、大陽は籠の右よりあるべし。



此畫は日の出の景色なり、今日の晴きたる天氣のふも啼く鳥の木より木を飛び遷る草の青々とて葉を露に濡たり、數多の農夫は野

に出でて田を耕し或は草を刈きり、農夫は晴きたる日は必野を出て働くものと知るべし、晴天は働けり、霖雨は遇ふとき耕きことを得べし、て穀菜を得ることな



陽の照らば處は甚熱、然きども樹の蔭は較涼、今日日中よなりたり、大

一きせぬは臥したる牛と
 立ちたる牛あり。又一匹
 の牛の熱さを消せんが為
 ま河を行きて水を飲まん
 とす。河の上は橋あり。○
 人を日中もあつたるゆゑ
 皆晝飯を食はる為は家よ
 歸せり。

日暮みなりたり。○人の野
 より歸り来り牛を庭はあ



り。○人の女は庭を出て
 で牛の乳を罎に桶は満し
 一めてこれを牛酪は製せ
 んとす。○此時男子晝間
 焚りたる草を積み又干し
 置ける穀を収めんが為は
 極めて忙し。今日も一務と
 果さざるとまの明日の業
 は妨あるがゆゑなり。
 神に常は我を守るゆゑは

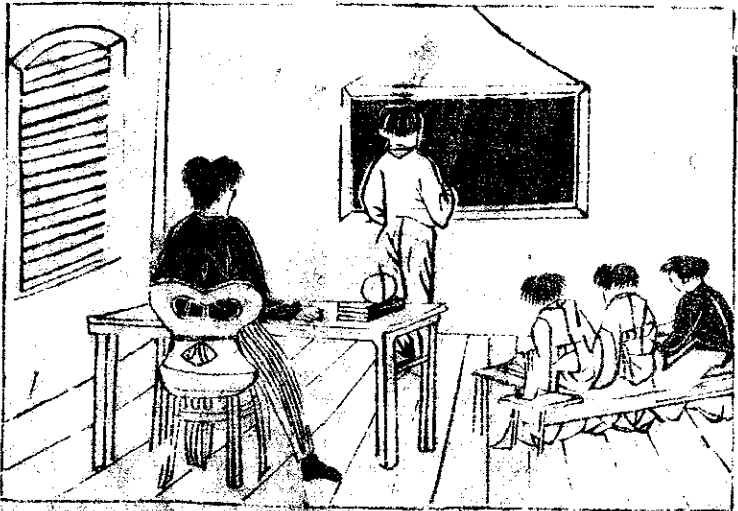
吾を獨りて暗夜ふ歩行するをも恐るゝことな



一〇又眠りたるをまよひも神の守りあるゆゑは暗き所も恐るゝことなり一〇神の暗き所も明は見るものゆゑ人の知らざる所と思ひて假も悪くまことをおせば忽罰を蒙ふるあり一〇人の知らざることぞ神の能く知るゆゑは善まものよの幸を與へ惡くまものよの禍を與ふるなり

第七

汝の物を數へ得るなり一〇父も一〇汝も十一の林檎を與へて母もまた五の林檎を與へるとまよひ幾箇の林檎を得たりと思ふや一〇十六の林檎あり〇然り汝等の物を數ふることを學ぶべし一〇大なる數と小き數とを知るべし一〇汝も石盤又の紙に數字を書得るなり一〇も一數字を



も石盤又の紙に數字を書得るなり一〇も一數字を

書き得ぬの務めてこれを書きしことを學ぶべし
 ○物の數を知らざるハ愚人なり



盆の上ま十一の梨ありこの中
 母ハ三持ち去きり然らハ残り
 たる梨子の幾箇とあきりや
 残りたるハハあり



汝等の文字を讀み得るハ
 文字を讀むことを知らざれば
 人より贈りたる書
 状をも讀むこと能はず
 ○又書籍を讀み得ざるときハ
 事を知ること能はず
 ○事を知らざる人の縦才ありと雖用ふる適せざるあり
 ○ゆるよ文字を讀むこと

汝等の文字を讀み得るハ



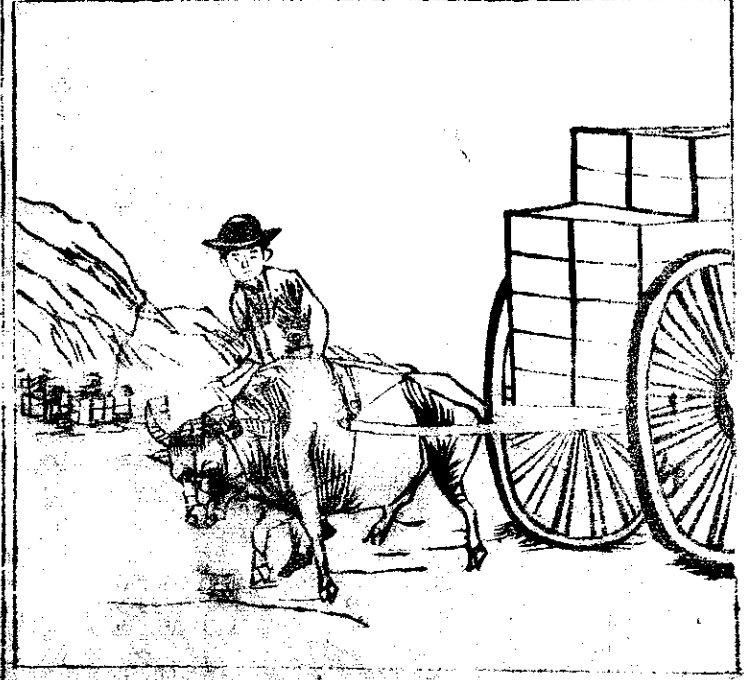
汝等の文字を讀み得るハ
 文字を讀むことを知らざれば
 人より贈りたる書
 状をも讀むこと能はず
 ○又書籍を讀み得ざるときハ
 事を知ること能はず
 ○事を知らざる人の縦才ありと雖用ふる適せざるあり
 ○ゆるよ文字を讀むこと

とぞ知らざる者と同く愚人といふなり。されば汝等ハ務めて文字を讀むことを學ぶべし。馬ハ實用ハ適みべき畜類あり陸地ハ於て荷物を運ぶ馬無くてハ不便なり。○馬ハ畜類の犬あるものにて顔長く鬣あり。○背の上ハ荷を負ひて遠きハ輸るもあり人を載せて速く走るものあり又車を引くものあり。



あるあり、

牛も馬と同く實用ハ便なる畜類中にて能く車を引き又ハ荷を負ひて遠きハ輸るものあり。○されども牛ハ人を乗せて走ること能はず。○牛の肉ハ食物となりて能く滋養をなし又牝牛ありハ乳汁を擠り取ること



を得るなり。汝の著たる衣服ハ何といふ織物ありや。○上衣



ハ糸織ニシテ羽織ハ黒羅紗あり。○汝ハ絹と木綿と羅紗の中ハ何きハ尤暖あるものと思ふや。羅紗ハ毛織なきハ第一ハ暖あり其次ハ木綿とい絹と又其次なり。

髪ハ白き單衣と紺色の單衣あり。○汝ハ何きハ暖なりと思ふや。○白き色ハ太陽の熱を引くと、少きゆゑハ夏の涼と雖冬ハ寒し。○紺色ハ太陽の熱通ひ易きゆゑハ冬の暖ありと雖夏ハ暑し。○人々夏の多く、白衣を著冬ハ多く、紺色の衣裳を著るハこの理よりてあり。



爰ハ二枚の圖あり皆人の働く状を畫けり。○初



の圖ハ田より下
 たりて秧を植
 るどころあり
 ○この人の肘
 も脛も露をせ
 りこれ働くよ
 便あるがも急

なり、

次の圖ハ稲を刈りて家へ持ち帰りて

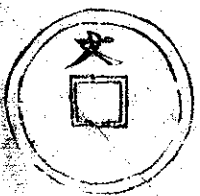
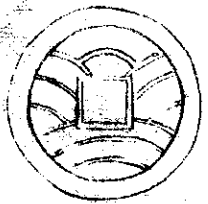
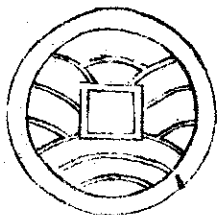
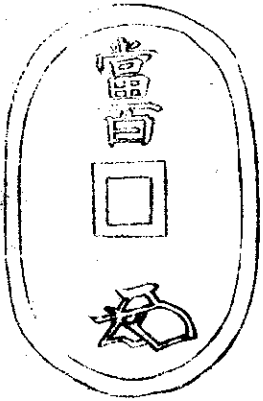
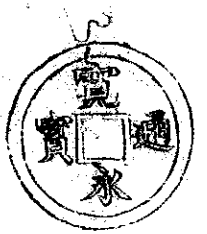
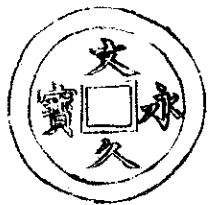
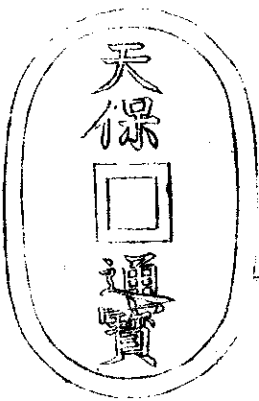


又稲をむきて
 米を取る所を
 見るべし。○此
 人々の衣ハ汗
 は濡ひて乾く
 とまきあし。○農
 夫ハ此の如く

働うざれば穀物を得ることなり。○汝等穀物を
 食する毎も農夫の苦勞を想ひ給へ。○汝等辛苦あり
 出でたるを知りて其業を怠るべからば



これハ蠶を養ひ絲を繰る所なり○數多の女皆
 朝早く起き夜中までも
 眠らばりて髪も結をす
 日々息ふ間なく働けり
 ○又二人の男あり桑を
 採る所あり○此男は野
 り出でて耕す人と同ト
 く肘も脛も露をりかど
 盡して働けり○此の如
 く數多の男女の苦勞あり
 て製するは非されば絲を生せず絹を得ること
 能とべし○汝等暖ある衣を着たるは蠶を養ひ絲を取る人々の苦勞を念るべからば
 爰に種々の貨幣あり



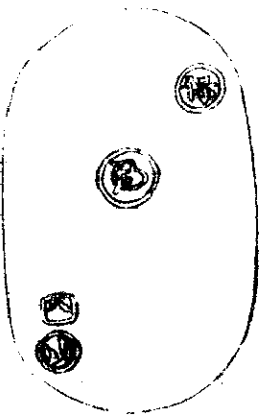
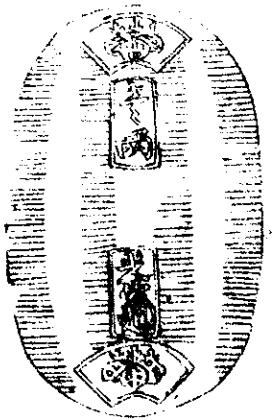
一

二

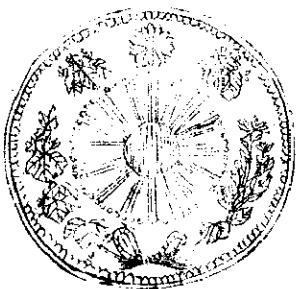
三

四

右四品の貨幣を鑄ぐいし幕府政を執るるより
 あり今日までも通用するもの是あり



此五品の貨幣を鑄ぐいし幕府政を執るるより
 通用せしものなり



右五品の貨幣を鑄ぐいし幕府政を執るるより

右五品の貨幣は金貨幣と云ふ



右三品を銅貨幣と云ふ
此三種の貨幣は朝廷の發行より當今の通用を

小銅錢二箇を二厘といひ十厘を二錢といひ百
錢を一圓といふ故に十二錢半は金貳米に當り
り二十五錢を二分に當たり五十錢は二分に當
たるなり

小學讀本第一終

長濱竹次郎

明治十七年一月七日 翻刻御届

同 年三月 刻成

福岡縣筑前國福岡區福岡
下名島町五十七番地

葵苑人

葵苑人

菊竹儀平

菊竹儀平